

光を 描く

美術家
吉村政仁



光を描くということ

目の前に紙と鉛筆があると想像して下さい。

お題は「真白な紙の上に真白な球体を描く」です。

皆さんはどのような方法で白い球体を表現しますか？

白紙に「線」を引き、その中で立体に見せるための「陰影」を入れる方が多いと思いますが、これが一般的な日本画の素描です。

では、「真白な紙の上に真白な球体を、線を使わずに描く」と言われたらどうですか？

陰影のみで球体を描かなければいけませんね。でも、これが一般的な西洋画のデッサンです。現実世界に線という「もの」は存在しません。線はあくまで概念の産物です。私たちが物事を認識し、他者に意志を伝達する際に使う言語や記号と同じです。

なぜ「西洋画が陰影を描き、光を描くのか？」です。

西洋の絵画は宗教画を原点とします。神の存在を言語圏の違う人々や聖書を読めない人々に「見せる」道具として限りなく本物（真実）のような空間に、目に見える形で神が存在しなければならなかったのです。そのためには、遠近法に支配されている視覚画像を正確に二次元平面に描き出す必要があります。また、立体画像を描き出すための必須の手法です。つまり、三次元である現実世界の

空間を忠実に再現することが、西洋絵画の歴史当初からの目的だったのです。

それに対し、東洋では物と物の違いを認識するのは「領域を分ける線」であると考えました。また、空間把握の方法も遠近法のように視点を定めず、主観的・観念的に二次元表現の構成をめざしたのが東洋画ということになります。

線は二次元の平面では、大変有効な領域分けの役割を果たします。いわゆる「線引き」というやつですが、現実には存在しない線で領域を分けると、「そこそこは違うのだ」という認識を促す記号として機能します。絵を描くための紙や布などが二次元であるということの大前提にし、それをありのまま受け入れたのだと思います。

日本画史上、そこに見えている三次元空間をそのまま二次元平面に写し取るという、イリュージョンを作る考え方は追求されませんでしたし、光の描写追求もされていません。

しかし、西洋画も東洋画も三次元空間を二次元で表現することに違いはありません。欠落している二次元の補完方法として「見えるものをそのまま見えるように」置き換えることを優先させるか、「私は、このように見ている」という主観表現解釈を優先するかの違いだろうと思います。

絵の具の定着

西洋画と東洋画の違いを生んだもうひとつの大きな要因に、絵の具の違いがあります。

絵の具は、自然の鉱物を砕いて微粒子にしたものと定着材を混合させたものです。この定着剤の性質が画法に大きな影響を与えます。

油絵の具が発明されて以降、西洋では画面を垂直に立てたまま対象物を描くことが一般的になりました。この書き方では、画家は、顔を大きく動かすことなく、眼球を左右に移動するだけで対象物を写し取ることが出来ます。

一方、東洋の水溶性絵の具では画面を水平に寝かさなければ絵の具が流れてしまいます。そのため、画家は対象物から一旦目を放し、顔を下に向け描かねばなりません。この違いは対象物の描写時に、大きな時間的差異と手間が生まれる要因にもなるのです。

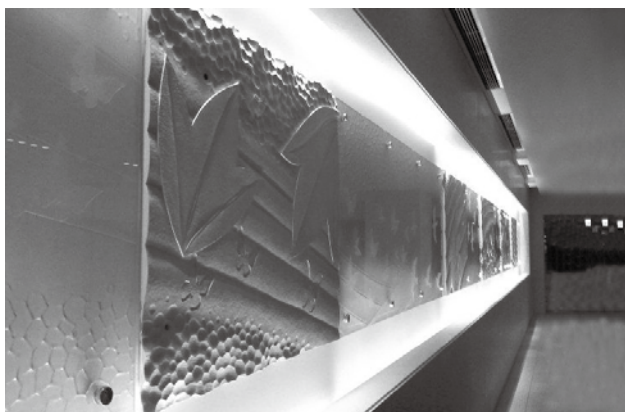
油性画材では観察↓描画が容易になります。水性画材では観察↓記憶↓構成↓描画と絵を描くまでの手間隙が格段に増えます。

こうして西洋絵画は、現実空間を観察しながら写しとるという直接的な空間把握の世界観に向かい、東洋絵画は外界を一度頭に入力してから、描画に

到る前に記憶の世界を画面上に再構築するという描画方法になりました。この描画手法の違いと、絵画そのものに対する考え方の違いから西洋絵画と東洋絵画は、文化として独自の変遷をたどっています。

何を表現するのか

西洋絵画が三次元の現実世界を二次元の世界で表現しようとする限り、欠落部分をどのように補完するかは永遠の課題です。そのため、西洋では二十



ガーデンシティ品川御殿山 エントランスモニュメント

世紀に入り、哲学や科学を持ち込みながら絵画の再構築を行い、やがては絵画そのものを全否定した歴史を持っています。しかし、日本では明治以降、西洋の実験的世界観を取り込みながらも、始めから絵画とは二次元であるという理解は変わっていません。

現在、私は水性画材である墨を用いて画面を水平に置き、「墨の黒」を西洋デッサンで光を描く際の闇と位置づけた作品に取り組んでいます。「線としての闇」を描くことを繰り返し、個別に制作されたパネルを組み合わせるといふ手法です。そのことで、光と闇の空間を絵画的空間として再構築し、日本画の新しい空間表現を創造できるのではないかと、という考えから始めた実験的な手法です。

欠落した次元の正しい解釈や正解はありません。東西美術史の経緯をふまえた上で、絵画に欠落した次元の解釈を自分自身で考え、「私自身の見方」を加えることで第三の次元を完結させることが、私が絵画を描く理由だと思っています。

その第三の見方が「絵を絵として」成り立たせ、ものをどのように見るかという「問いかけ」を提示することになれば良いのですが。

美術家

吉村 政仁

よし むら まさ ひと

東京生まれ

多摩美術大学 絵画科 日本画専攻

日本画家キャリアの当初は、国内で数多くの個展を開くと共に国際展へも積極的に参加。現在は、日本画家としての顔以外に、写真家としての活動や、建築や庭園のデザイン等も手掛けている。

最近の活動

ガーデンシティ品川御殿山

エントランスモニュメントのデザイン

平城遷都1300年祭記念展出展

軽井沢レイクガーデン/庭園デザイン

丸亀市再開発プロジェクト/

企画・デザインその他多数

